

八代集の形容詞

—— 語彙の計量的考察 ——

村 田 菜穂子

1. はじめに

前稿①「上代形容詞の語構成」¹⁾を承け、前稿②「八代集の形容詞——語構成論的考察——」²⁾では、八代集に使用された形容詞について、語構成、各構成要素の階層的結合の様相、最終結合次の造語形式等を考察し、さらには、上代形容詞の語構成との相違点について述べた。本稿はこれを承け、八代集で使用された形容詞の量的構成を明らかにしながら、八代集の形容詞の特色を探ろうとするものである。

2. 活用から見た八代集の形容詞

まず、八代集の各作品に使用された形容詞の活用別の比率を見ておこう。

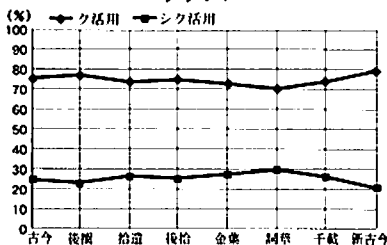
表1 <異なり語数>

活用	作品	古今	後撰	拾遺	後拾	金葉	詞華	千載	新古今	八代集全体	
										異なり語数	比率(%)
ク活用	語数	94	93	100	94	69	45	73	91	207	77.2
	比率(%)	75.8	76.9	73.5	74.6	72.6	70.3	73.7	79.1		
シク活用	語数	30	28	36	32	26	19	26	24	61	22.8
	比率(%)	24.2	23.1	26.5	25.4	27.4	29.7	26.3	20.9		
合計		124	121	136	126	95	64	99	115	268	100.0

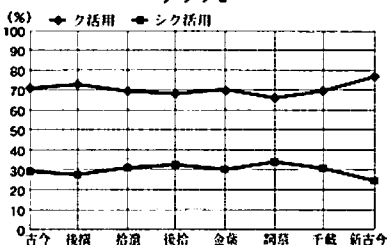
表2 <延べ語数>

活用	作品	古今	後撰	拾遺	後拾	金葉	詞華	千載	新古今	八代集全体	
										延べ語数	比率(%)
シク活用	語数	397	572	517	393	224	116	362	593	3174	71.0
	比率(%)	70.9	72.8	69.2	67.5	70.0	65.5	69.6	76.0		
ク活用	語数	163	214	230	189	96	61	158	187	1298	29.0
	比率(%)	29.1	27.2	30.8	32.5	30.0	34.5	30.4	24.0		
合計		560	786	747	582	320	177	520	780	4472	100.0

グラフ1



グラフ2



八代集いずれの作品とも、ク活用形容詞とシク活用形容詞の異なり語数には大きな開きがあり、作品の規模（歌数）に関わらず、ク活用形容詞とシク活用形容詞の異なり語数の比率は一定してほぼ3：1の割合になっている（表1・グラフ1）。また、延べ語数においても、各作品ともク活用形容詞とシク活用形容詞との間には開きが認められるが、ク活用とシク活用の比率差は異なり語数の場合よりもやや縮まって、一定してほぼ5：2となっている（表2・グラフ2）。他方、中古の散文作品でも、異なり語数におけるク活用対シク活用の比率はおおよそ2：1、延べ語数ではク活用対シク活用の比率がおおよそ3：2となっていることが報告されている^(4.3)。中古の形容詞を活用から捉えると、散文作品・韻文作品ともにク活用の方が多という点での共通性が認められることになるが、八代集に出現した形容詞のク活用とシク活用の比率差は散文作品以上に大きいという様相がうかがえる。このような様相を見ると、阪倉篤義氏「歌ことばの一面」^(4.1)における、万葉集と八代集とを比較された考察、すなわち、

シク活用形容詞が、『古今集』以後の平安和歌（八代集）において非常に減る（括弧内引用者補充）

という指摘、並びに「日記・物語に非常によく使われる形容詞でありながら和歌には使われない形容詞があるが、それらは圧倒的に情意性のシク活用の形容詞が多い」という指摘が想起される。阪倉氏は歌には避けられる形容詞が情意性の語に集中する理由について、『古今集』以後の歌では「暗の歌という性格」を強くし、「作者の個人的感懐の理解を読み手に強制することを避けるというのが、八代集の歌のいき方であった結果」と述べておられる。しかし、八代集に使用された形容詞（延べ語数）で第一位のものはク活用ナシ（896語）で突出しているが、第二位コヒシ（227語）、第三位カナシ（204語）がこれに続き、この他、第七位ヲシ（108語）、第九位ウレシ（86語）、第十位オナジ（77語）とシク活用の形容詞が十位以内に中にも並ぶ。このように、シク活用形容詞にも多用される語はいくらか存在するが、阪倉氏の指摘にあるように和歌に避けられる語が多数存在することも事実で、前者と後者との境界をもう一步突っ込んで捉える必要があるように思われるけれども、この時点では明確な答えを出し得ない。

3. 形容詞の古さと新しさ

さて次に、八代集に使用された形容詞がどの程度上代形容詞^(4.5)を受け継

ぎ、あるいはそれ以後の新しい形容詞をどの程度用いているのかを見ることにしたい。

八代集の各作品に使用された形容詞を、すでに上代から存在が認められた「既存」の語と上代にはその存在が認められなかった「新出」の語とに分け、各作品におけるそれぞれの使用状況を示したものが表3・グラフ3<異なり語数>および表4・グラフ4<延べ語数>である。

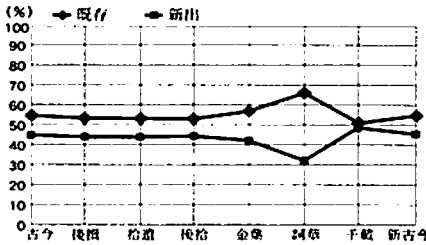
表3 <異なり語数>

分類	作品	古今	後撰	拾遺	後拾	金葉	詞華	千載	新古今
既存	語数	68	65	73	67	55	43	50	63
	比率(%)	54.8	53.7	53.7	53.2	57.9	67.2	50.5	54.8
新出	語数	56	56	63	59	40	21	49	32
	比率(%)	45.2	46.3	46.3	46.8	42.1	32.8	49.5	45.2
合計		124	121	136	126	95	64	99	115

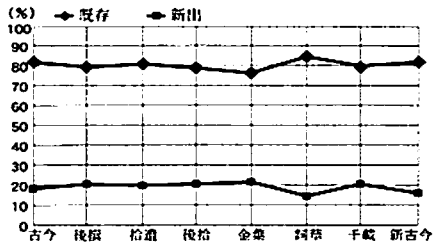
表4 <延べ語数>

分類	作品	古今	後撰	拾遺	後拾	金葉	詞華	千載	新古今
既存	語数	456	627	598	457	245	150	415	644
	比率(%)	81.4	79.8	80.1	78.5	76.6	84.7	79.8	82.6
新出	語数	104	159	149	125	75	27	105	136
	比率(%)	18.6	20.2	19.9	21.5	23.4	15.3	20.2	17.4
合計		560	786	747	582	320	177	520	780

グラフ3



グラフ4



異なり語数から見た場合、すべての作品で既存の形容詞が新出の形容詞を上回っている。中でも、詞華集では既存の形容詞の比率が高く（67.2パーセント）、新出の形容詞（32.8パーセント）との開きが大きくなっている。そして、これとは反対に、千載集では既存の語と新出の語の割合はほぼ同程度で両者の間には開きがほとんどなく、詞華集と千載集以外の作品では、ほぼ一律に2割程度既存の形容詞が新出の形容詞を上回っている状況が認められる。他方、延べ語数の場合には、既存の形容詞と新出の形容詞との比率差は異なり語数の場合よりも格段に大きく、中でも詞華集では他の作品に比べて両者の比率差がやや大きくなっているが、残りの作品では一定して既存の形容詞对新出の形容詞の比率がほぼ4：1になっている。

では次に、八代集全体を一つの共時態の作品として設定し、使用された形容詞の考察を行ってみよう。ここで言う「共時態」とは、「同一の表現体系に属するといふ意識」に基づく「規範意識にささへられた、とざされた世界の言語」を指し⁽¹⁶⁾、そういう意味で八代集全体を一つの共時態と扱うことも可能であると考え、八代集全体で使用された形容詞について、既存の形容詞

と新出の形容詞とに分けての比較、さらにそれを活用に分けての比較を試みたものが表5<異なり語数>・表6<延べ語数>およびグラフ5・6である。

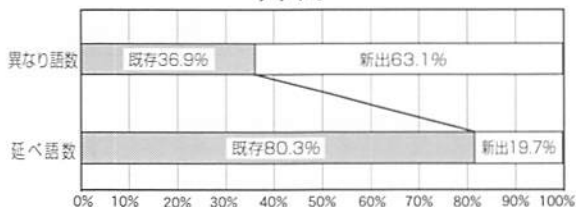
表5 <異なり語数>

分類	語数	比率(%)	活用	語数	比率(%)
既存	99	36.9	ク活用	65	24.2
			シク活用	34	12.7
新出	169	63.1	ク活用	142	53.0
			シク活用	27	10.1
全体				268	100.0

表6 <延べ語数>

分類	語数	比率(%)	活用	語数	比率(%)
既存	3592	80.3	ク活用	2397	53.6
			シク活用	1195	26.7
新出	880	19.7	ク活用	777	17.4
			シク活用	103	2.3
全体				4472	100.0

グラフ5



グラフ6



異なり語数から見た場合には、八代集全体では明らかに新出の形容詞の方が既存の形容詞よりも比率が高く(グラフ5)、特に、新出のク活用形容詞の比率が高くなっている(グラフ6)。他方、延べ語数では、反対に新出の形容詞の比率は低く、既存の形容詞の四分の一程度でしかなく(グラフ5)、特に、新出のシク活用形容詞の比率が低くなっている(グラフ6)。異なり語数と延べ語数とを比較することにより、上代から存在する既存ク活用・既存シク活用の方が新出ク活用・新出シク活用よりも繰り返し使用されていたことが読み取れる。

繰り返し使用される程度がどのくらいであるのかを比較するために、既存ク活用・既存シク活用、新出ク活用・新出シク活用の、それぞれの形容詞の一語当りの平均使用回数^(注7)を算出してみる。算出は次のようにして行った。
延べ語数/異なり語数=一語当りの平均使用回数

既存ク活用 2397/65=36.9 既存シク活用 1195/34=35.1
 既存全体 3592/99=36.3

新出ク活用 777/142=5.5

新出シク活用 103/27=3.8

新出全体 880/169=5.2

これを見ると、既存の形容詞については一語当りの平均使用回数はク活用とシク活用とでは大きな差はないが、若干ク活用に比べてシク活用の方が平均使用回数は少なく、また、新出の形容詞の場合にも、ク活用に比べてシク活用の方が平均使用回数が少なくなっている。全体として、一語当りの平均使用回数は新出の形容詞（全体）5.2回に対して既存の形容詞（全体）36.3回と、上代から存在する形容詞は新出の形容詞に比べておよそ7倍程度多く繰り返し用いられており、語の古さ・新しさが延べ語数と深く関わっている状況が顕著にうかがえる。

4. 結合タイプから見た上代形容詞と八代集の形容詞

前稿②では、語構成要素の結びつきが単純な対等の関係にあるのではなく、階層的な結合を行っていることについて触れ、八代集に出現した形容詞において19種類の結合タイプが抽出されることについて述べた。さらに、上代形容詞と八代集の形容詞（新出）とを比較して、上代形容詞で最も割合の高かったⅠ単一語基型^(註8)が、八代集の新出形容詞では三分の一になり、代わって、八代集の新出形容詞ではⅢ二次合成型が上代形容詞の三倍になるという逆転が認められることについて述べた。

本稿では、型別の比較をさらに細分化し、それぞれの結合タイプについて考察を行うことにする。

以下に示した表7は、上代形容詞および八代集に出現した形容詞を結合タイプに分け、それぞれの異なり語数と比率を示したものである。

上代形容詞の結合タイプとしては、①から⑧と⑩および⑪の10種類が存在する^(註9)。すなわち、残りの9種類は八代集における新出形容詞から抽出された新たな結合タイプということになり、上代形容詞と比べて八代集の形容詞の結合タイプはおよそ2倍になっている。新たな結合タイプは⑨⑫⑬⑭⑯⑰（以上4単位語）⑱（5単位語）⑲（6単位語）で、すべて4単位以上の語構成要素からなる形容詞である^(註10)。上代形容詞には4単位語がわずかに2語（カタジケナシ・シタゴコロヨシ）存在するのみで残りはすべて2乃至は3単位語であったが、八代集では単位数の多い形容詞が多数出現していることに伴って結合タイプが多様化している実態がうかがえる。

表7 (○は語基、□は単語、△は接辞)

単位数	語構造	結合タイプ	上代形容詞		八代集(全体)		八代集(新出)	
			語数	比率(%)	語数	比率(%)	語数	比率(%)
2	(イ)	① (○+△)	144	58.3	103	38.4	26	15.4
	(ロ)	② (□+△)	3	1.2	4	1.5	3	1.8
3	(ハ)	③ [(○+△)+△]	22	8.9	13	4.9	4	2.4
	(ニ)	④ [△+(○+△)]	9	3.6	3	1.1	3	1.8
	(ホ)	⑤ [(○+○)+△]	13	5.3	3	1.1	1	0.6
		⑦ [(○+○)+△]	6	2.4	5	1.9	5	3.0
	(ヘ)	⑥ [□+(○+△)]	44	17.8	111	41.4	101	59.8
	(ト)	⑧ [(□+□)+△]	4	1.6	2	0.7	2	1.2
4	(チ)	⑨ [(○+△)+△]+△]	1	0.4	1	0.4	1	0.6
	(リ)	⑩ [△+[△+(○+△)+△]]			1	0.4	1	0.6
	(ズ)	⑪ [(○+△)+(○+△)]			1	0.4	1	0.6
	(ル)	⑫ [(△+□)+(○+△)]			1	0.4	1	0.6
	(ヲ)	⑬ [(○+□)+(○+△)]			2	0.7	2	1.2
	(カ)	⑭ [□+△+(○+△)+△]			2	0.7	2	1.2
		⑮ [(□+□)+○]+△]			1	0.4	1	0.6
		⑯ [□+□+(○+△)]			2	0.7	2	1.2
		⑰ [(□+□)+(○+△)]	1	0.4	11	4.1	11	6.5
	5	(ヨ)	⑱ [(□+□)+△]+(○+△)]			1	0.4	1
6	(ク)	⑲ [(○+△)+△]+△+(○+△)]			1	0.4	1	0.6
合計			247	100.0	268	100.0	169	100.0

また、各結合タイプの比率を見ると、上代形容詞では、第一位は①(例、イタシ・ヒサシなど)の58.3パーセント、第二位は⑥(例、ツネナシ・ウラガナシなど)の17.8パーセントであるが、八代集の形容詞では、第一位と第二位とが逆転して⑧が41.4パーセントで第一位となり、①38.4パーセントを抜いている。上代形容詞では①と⑧との間にはかなりの差(語数にして100語)があったにもかかわらず、八代集では⑧の結合タイプが①を上回り、逆転の現象が見られるようになる。この現象をより明確化するために、八代集に継承されている上代形容詞を除いた新出形容詞だけを取り出して上代形容詞と比較してみると、新出形容詞では、結合タイプ⑧の比率が59.8パーセント、①の比率が15.4パーセントとその差が一層拡大し、八代集で新たに出現した形容詞と上代形容詞との結合タイプにおける違いがより一層明確に浮かび上がってくる。

おそらく、形容詞の結合タイプとしては、①が最も基本的なものであろうから上代形容詞においては①のものが断然多くなっているが、上代では萌芽的とも言うべき段階にあった⑧が八代集において著しく発達し急進したことにより上述のような逆転が見られた、すなわち、上代形容詞と八代集の形容詞との間に結合タイプに交替現象が起こっているものと考えられる。もっとも、①および⑧以外の結合タイプの形容詞はいずれも少数であり、上代形容詞でも八代集の形容詞でも、結合タイプとしては大多数を占める①乃至は⑧

が中核的なものとして位置付けられるであろう。

5. 造語形式から見た上代形容詞と八代集の形容詞

前稿②において、八代集で使用された形容詞の一つ一つについて、語構造を考察すると共に、造語形式をできるだけ簡略化して表すために最終結合次における造語成分の結びつきを二項式 $[\alpha+\beta]$ にて表し、八代集の形容詞の全造語形式を上代形容詞のそれと比較する形で提示した。これに基づき、本稿では、上代形容詞と八代集で新たに出現した新出の形容詞のそれとを比較してみる。

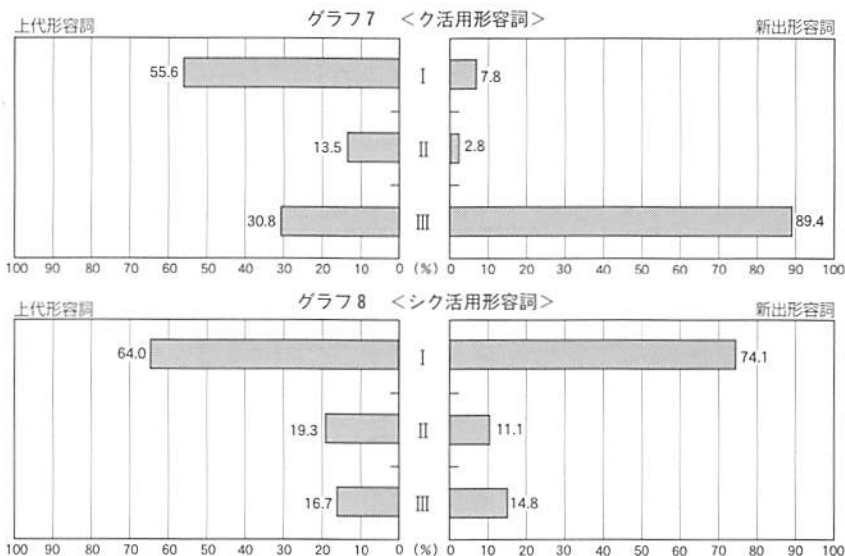
まず、Ⅰ単一語基型・Ⅱ合成語基型・Ⅲ二次合成型に分け、各型毎に上代形容詞と八代集の新出形容詞とを比較してみよう。

表8 <上代形容詞>

型	全体		ク活用		シク活用	
	語数	比率(%)	語数	比率(%)	語数	比率(%)
I	147	59.5	74	55.6	73	64.0
II	40	16.2	18	13.5	22	19.3
III	60	24.3	41	30.8	19	16.7
合計	247	100.0	133	100.0	114	100.0

表9 <新出形容詞>

型	全体		ク活用		シク活用	
	語数	比率(%)	語数	比率(%)	語数	比率(%)
I	31	18.3	11	7.8	20	74.1
II	7	4.1	4	2.8	3	11.1
III	131	77.5	127	89.4	4	14.8
合計	169	100.0	142	100.0	27	100.0



上代形容詞(表8)では、Ⅰ型が59.5パーセント、Ⅱ型が16.2パーセント、Ⅲ型が24.3パーセントであるのに対して、八代集の新出形容詞(表9)では、Ⅰ型が18.3パーセント、Ⅱ型が4.1パーセント、Ⅲ型が77.5パーセントとなっている。いずれの場合もⅡ型が最も低く、Ⅱの造語形式が垂流であるという

見方ができる。

ところで、造語形式による分類は、造語論的な観点から捉えた、いわば、造語における実際の結合方式の類型化であり、語構造的な観点から捉えた結合タイプによる分類とは表裏一体の関係にある。従って、前稿②(表2)で見たように、結合タイプにおける新旧形容詞のⅠ型とⅢ型の逆転現象は、直ちに造語形式にも映し出され、造語形式という観点から新旧形容詞を捉えた場合にも、新出形容詞におけるⅠ型の減少とⅢ型の増加という結果へと結びついている。

また、上記の分類にさらに活用の違いを加味して上代形容詞と新出形容詞とを比較した場合、特に上代形容詞と新出形容詞とが大きく相違する点は、新出のク活用形容詞におけるⅢ型の割合が著しく高くなっている点と同時に、同形容詞のⅠ型の割合が著しく低くなっている点にある(グラフ7)。つまり、上代形容詞と新出形容詞との間に認められる相違は、シク活用の側にあるのではなく、とりわけク活用の側に認められるのである。

次に、上記の分類をさらに細分化して造語形式毎に分け、それぞれの造語形式がどの程度用いられているかを示したものが表10<ク活用>と表11<シク活用>である。

表10 <ク活用形容詞>

型	造語形式	上代形容詞		八代集形容詞			
		異なり語数	比率(%)	異なり語数 (全体)	比率(%)	異なり語数 (新出)	比率(%)
Ⅰ	語基+シ	60	45.1	46	22.2	7	5.0
	語基+ナシ	7	5.3	3	1.4		
	動詞被覆形+シ	7	5.3	8	3.9		
	形容詞(語幹)+ナシ			1	0.5	1	0.7
	形容詞(語幹)+ケシ			1	0.5	1	0.7
	形容動詞(語幹)+ナシ			1	0.5	1	0.7
	名詞+ケシ			1	0.5	1	0.7
	小計	74	55.6	61	29.5	11	7.8
Ⅱ	(語基+キ)+ナシ	1	0.8	1	0.5	1	0.7
	(語基+ケ)+シ	12	9.0	5	2.4	1	0.7
	(語基+ケ)+ナシ	1	0.8	2	1.0	2	1.4
	(語基+セ)+シ	1	0.8	1	0.5		
	(語基+ネ)+シ	1	0.8	1	0.5		
	(語基+メ)+シ	1	0.8				
	(語基+ツカ)+ナシ	1	0.8	1	0.5		
	小計	18	13.5	11	5.3	4	2.8

型	造語形式	上代形容詞		八代集形容詞			
		異なり語数	比率(%)	異なり語数 (全体)	比率(%)	異なり語数 (新出)	比率(%)
Ⅲ	カ+形容詞	2	1.5				
	サ+形容詞	1	0.8				
	タ+形容詞	4	3.0				
	モノ+形容詞			1	0.5	1	0.7
	ケ+形容詞			1	0.5	1	0.7
	語基+形容詞	2	1.5	4	1.9	4	2.8
	形容詞(語幹)+形容詞	2	1.5	1	0.5	1	0.7
	形容動詞(語幹)+形容詞(無シ)			2	1.0	2	1.4
	名詞+形容詞(無シ以外)	17	12.8	28	13.5	24	16.9
	名詞+形容詞(無シ)	8	6.0	39	18.8	35	24.6
	動詞(連用形)+形容詞(無シ以外)	5	3.8	47	22.7	47	33.1
動詞(連用形)+形容詞(無シ)			12	5.8	12	8.5	
小計		41	30.8	135	65.2	127	89.4
合計		133	100.0	207	100.0	142	100.0

表11 <シク活用形容詞>

型	造語形式	上代形容詞		八代集形容詞			
		異なり語数	比率(%)	異なり語数 (全体)	比率(%)	異なり語数 (新出)	比率(%)
Ⅰ	語基+シ	35	30.7	17	27.9	3	11.1
	語基+ジ	2	1.8	1	1.6		
	語基+ガマシ			1	1.6	1	3.7
	動詞被覆形+シ	33	28.9	26	42.6	14	51.9
	名詞+ジ	2	1.8				
	名詞+ガマシ			1	1.6	1	3.7
副詞+シ	1	0.9	2	3.3	1	3.7	
小計		73	64.0	48	78.7	20	74.1
Ⅱ	(語基+カ)+シ	3	2.6				
	(動詞被覆形+カ)+シ	1	0.9	1	1.6		
	(動詞被覆形+ラ)+シ	1	0.9	1	1.6		
	語基の重複+シ	10	8.8	2	3.3	1	3.7
	形容詞(語幹)の重複+シ	3	2.6	1	1.6		
	名詞の重複+シ	4	3.5	2	3.3	2	7.4
小計		22	19.3	7	11.5	3	11.1
Ⅲ	モノ+形容詞	2	1.8	2	3.3	2	7.4
	語基+形容詞	2	1.8				
	名詞+形容詞	12	10.5	4	6.6	2	7.4
	動詞(連用形)+形容詞	3	2.6				
小計		19	16.7	6	9.5	4	14.8
合計		114	100.0	61	100.0	27	100.0

新旧形容詞の対比という視点から、活用別に上代形容詞と新出形容詞とを比較してみると、上代のク活用形容詞においては(表10)、Ⅰ型の「語基+シ」がおよそ半数に近い割合を占めている。これに対して、新出のク活用形容詞では、Ⅲ型の「動詞(連用形)+形容詞(無シ以外)」が33.1パーセント、同型「名詞+形容詞(無シ)」が24.6パーセントと高い割合を占め、この二つを合せると、57.7パーセントにも達する。後項(β)に位置する形容詞を無シカ

それ以外かを区別しなければ、「動詞（連用形）+形容詞」および「名詞+形容詞」の造語形式の合計は118語で83.1パーセントにも達し、新出形容詞142語中118語までがこれらの造語形式による複合形容詞ということになる。要するに、新出のク活用形容詞の中核的な造語形式は、「動詞（連用形）+形容詞」および「名詞+形容詞」という複合法によるものということがわかる。

これに対して、シク活用の場合は（表11）、上代形容詞と新出形容詞の異なり語数にかなりの開きがあるので単純に比較することは難しいが、上代形容詞においてはI型の「語基+シ」が35語（約3割）で最も多い形式であったが、新出形容詞ではこの形式の形容詞はわずかに3語しか造語されていない。また、I型の「動詞被覆形+シ」は上代形容詞においては33語で、「語基+シ」とほぼ同程度であったが、新出の形容詞ではシク活用形容詞27語中14語、すなわち、過半数が「動詞被覆形+シ」で占められている。総数としては新出のシク活用形容詞は極めて少数であるものの、「動詞被覆形+シ」という形式による造語は圧倒的に多く他の追隨を許さぬものであることになる。

ところが、新出のク活用形容詞で躍進したⅢ型の「動詞（連用形）+形容詞（無シ以外）」および「名詞+形容詞（無シ）」が、新出のシク活用形容詞ではこれらに相当する形式^(註11)は奮わず、わずか2語の造語にとどまっておき、活用の違いにより造語力の高い形式はかなり違っているという結論が導き出せる。

以上、上代形容詞においては両活用共にI型の「語基+シ」が造語力をもつ形式であるが、八代集における新出形容詞ではこの形式による造語があまり行われなくなる状況がうかがえた。「語基+シ」という造語形式は、最も基本的なものであると同時に最も古い造語形式であるとみなされ、中古以後においてはもはや前時代的なあまり用いられることのない形式であったと考えられるのではないか。その背景としては、「語基+シ」に採用される語基の数は無限大ではなく限られているものであることから、「語基+シ」の語基が限界を迎えつつあるという状況が考えられよう。

他方、Ⅲ型の「動詞（連用形）+形容詞」および「名詞+形容詞」（左記二形式いずれもについて「無シ」か「無シ以外」かを区別しない）に目を移すと、「語基+シ」による造語が中心であった上代形容詞では、ク活用の、「動詞（連用形）+形容詞（無シ以外）」および「名詞+形容詞（無シ）」、そして「名詞+形容詞（無シ以外）」の三つを合わせても30語（22.6パーセント）と、「語基+シ」の60語（45.1パーセント）の二分の一程度でしかなく、シク活

用の場合にも、「動詞（連用形）＋形容詞」および「名詞＋形容詞」の合計は15語（13.1パーセント）で、「語基＋シ」の35語（30.7パーセント）の二分の一にも満たない状況となっている。

一方、八代集の新出ク活用形容詞では、Ⅲ型の「動詞（連用形）＋形容詞」および「名詞＋形容詞」が83.1パーセントにも達し、新出のク活用形容詞ではとりわけ優勢な造語形式となっているが、これとは対照的に、上代形容詞では、Ⅲ型の「動詞（連用形）＋形容詞」および「名詞＋形容詞」の造語形式は上述のごとく「語基＋シ」の二分の一程度にとどまっている。Ⅰ型の「語基＋シ」が一次的な造語法と捉えられるのに対して、Ⅲ型の「動詞（連用形）＋形容詞」および「名詞＋形容詞」は、「語基＋シ」をはじめとするⅠ型の形容詞を後項（β）にとる二次的な造語法による形容詞であるから、当然、形容詞の発達段階としてはⅠ型に遅れるものであり、Ⅲ型の「動詞（連用形）＋形容詞」および「名詞＋形容詞」の造語形式は上代においては未だ発達途中の段階にあったものとの見方ができるのではないか。

そして、一般的に言われるように、ク活用の方が古く、シク活用はク活用よりも後発であるのではないかという見方に立つとき、新出のク活用形容詞において、Ⅲ型の「動詞（連用形）＋形容詞」および「名詞＋形容詞」の複合形式が旺盛な造語力を発揮する一方で、新出のク活用では「動詞被覆形＋シ」がⅠ語も造語されていない状況や、また、新出のシク活用形容詞においては、Ⅰ型の「動詞被覆形＋シ」による造語が活発であるものの、Ⅲ型の「動詞（連用形）＋形容詞」および「名詞＋形容詞」による造語は奮わず勢いがいない状況については、ク活用形容詞とシク活用形容詞との発達段階にずれがあることを物語っているようにも受け取ることができる。だが、釘貫亨氏^(註12)が指摘されるように、「動詞被覆形＋シ」がク活用に活用するのを避けたとすると、動詞を派生源として形容詞が造られる場合に、ク活用を選択することが難しいためにそれらはシク活用となり、従って、ク活用形容詞の生産は二次造語法のもう一方の複合法に頼らざるを得なかったという事情に拠っている可能性も考えられる。しかし、上代形容詞と八代集の形容詞とを比較しただけの段階では明確な解釈を提示することは難しく、中古の散文作品に使用されている形容詞やさらに後の中世における形容詞の実態を考察し、より正当性のある解釈を導き出すことを次の課題としたい。

- (注1) 村田菜穂子『国語語彙史の研究』20 (和泉書院、2001.3発行予定)
- (注2) 村田菜穂子『帝塚山学院大学日本文学研究』31 (2001.2発行予定)
- (注3) 安部清哉氏「形容詞語彙から見た『土佐日記』の位置—『更級日記』と比較しつつ—」(第52回「青葉ことばの会」研究発表会配布資料、1995.11)
- (注4) 『文学・語学』105 (1985.5)
- (注5) 前稿①において上代形容詞と認めた247語
- (注6) 阪倉篤義氏『語構成の研究』(角川書店、1966.3) 第一篇第四章
- (注7) 田島敏堂氏「語彙指標—語彙の数量的側面と語彙研究への視点—」(『日本語研究と日本語教育』(名古屋大学出版会、1992.10)
- (注8) 型の分類については前稿①に準じているが、多少説明をしておく、
「Ⅰ単一語基型」とは、単一の語構成要素である語基に接辞が付いた形容詞をそのように呼び、「Ⅱ合成語基型」とは、語構成要素が複数、すなわち、「語基+接辞」乃至は「語基+語基」という合成された語基に接辞が付いた形容詞を言う。また、「Ⅲ二次合成型」とは、前時代乃至は共時態においてすでに存在する形容詞に二次的に接辞もしくは語基が上接して形成のされた形容詞を指す。
- (注9) 前稿①「三 上代形容詞の語構造」参照。
- (注10) 前稿②「3. 結合の階層性」において、各結合タイプを次のように分類している。①②は「Ⅰ単一語基型」、③④⑤・⑨⑩は「Ⅱ合成語基型」、⑥⑦⑧・⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰・⑱・⑲は「Ⅲ二次合成型」。
- (注11) シク活用形容詞では「無シ」か「無シ以外」かの区別はないので「動詞(連用形)+形容詞」および「名詞+形容詞」を指す。
- (注12) 「古代日本語における形容詞の造語法に関する一考察」(『名古屋大学文学部研究論集』121、1995.3)

付 記

本稿は、日本学術振興会平成11-12年度科学研究費(奨励研究(A)・課題番号11710228)による研究成果の一部である。